

埼玉 SPF 豚センターと今後の構想

はじめに

「総合農政の担い手であり、未来産業のホープは養豚である」と明示されているが、わが国の養豚の生産路線は、多くの隘路と矛盾に阻まれて低迷を続けている現状は遺憾に堪えないものがある。最近では自立ないしは企業としての産業養豚を確立しようとする意欲の躍動がみられているが、残念ながら明日の経営が約束されず、進展が停滞している実状であるといっても過言ではないであろう。

現在、わが国の豚は品種改良が進み、かなり優秀なものが作育され、飼料は優れた完全配合飼料がぞんぶんに出回り、養豚技能者も多くなった。そして科学が進展し新しい医薬品が次々と研究開発され普及されているが、防疫という養豚経営の車軸(シャフト)に、現在の医療科学ではどうにもならないヒビが深くはいり込み、産業としての養豚経営の基盤を根本からゆさぶっている事実は、養豚経営者のだれもが痛烈に認識しているところであろう。

私はここ数年、養豚経営の車軸をむしばむ犯人の追及に全力をあげ、1965年ごろ農林省家畜衛生試験場の柴田・波岡博士らの研究発表に注視し、また同時に諸外国の文献をあさり犯人の本態を見きわめ、SPF豚に異常な関心をもった。そして1966年、埼玉 SPF pigs farmの創設を企図したのである。そこで、埼玉 SPF豚センターの今日に至った経緯をのべ、その概要を紹介し、今後の構想の一端に触れることにしたい。

I 防疫は養豚経営の車軸である

事業経営の繁栄には4C原則がある。すなわち、Condition, Capital, Capacity, Characterの4Cの調和が事業経営の明日の繁栄を約束するということである。

(株)埼玉種畜牧場長

笹崎龍雄

この4C原則を、あえて養豚経営にあてはめてみると次のようになるであろう。

- ①品種改良 経済能力が優れ、商品価値の高い豚(自動車の右輪)
- ②飼料 良質の安い飼料の入手(自動車の左輪)
- ③防疫 予防衛生に透徹した健康管理(自動車の車軸)
- ④技能者 飼養管理技術と経営能力の併立(自動車の運転手)

この4本柱のバランスがとれ、スムーズに回転することによって養豚経営という車は明日に向かって前進するものと考えられる。

豚は健康第一主義に透徹し、予防衛生に万全の施策を講じなくてはならないことは述べるまでもない。昭和36年(1961)以降、わが国は世界各国から最も経済能力の優れたLandrace, Large white, Hampshire, Saddlebackなどの新しい品種を多数輸入した。そして鋭意、改良を加え国際水準に伍して遜色のないりっぱな豚を作育し、その実績は顕著なものがあるといっても支障ないであろう。

この輸入に伴って、かつて日本に存在しなかった新しい豚の病原菌が不知不識のうちに上陸し、処女地であった、わが国の全土に燎原の火のごとく伝播し、根強く浸潤蔓延し猛威を振っている。この病原菌のために養豚の多頭化、

企業化への道は阻止されているといっても過言ではないであろう。

これらの病気は主として慢性、流行性の伝染病で、豚コレラのように急性で死亡率の高いものではなく、真綿で徐々に首をしめるような病気で、死亡率は低い、発育が停滞し、食欲はあるが遅々として生長しないやっかいな病気である。一言でいえば「えさの食い逃げをする白昼泥棒」ともいえる伝染病である。

いま、これらの病名と浸潤度、被害度の私の推測を一括要約してみると表1のようであろう。その損害は私の試算では年間300億円以上と推察している。これらのうち、SEP、ARは原因が不明でワクチン、治療薬もなく早期発見が困難で施す術もなく、また最近では豚赤痢が想像外に蔓延し心痛のきわみである。

わが国の豚の防疫は豚コレラに主力を傾倒しているが、私は豚コレラは一種の人災ともいふべき伝染病で、生ワクチンの実用普及の今日、全頭もれなく確実に注射することを義務とし、所定の防疫処置を徹底すれば防圧できるものであると信じている。

しかし、表1のように私は未だ法定伝染病としてとりあげられていない流行性、慢性伝染病の撲滅をしないかぎり産業としての事業養豚の健全経営は、至難であり不可能であると考えている。

これからの養豚経営は豚病との戦いであるといっても過言であるまい。近代養豚経営は、豚

を SPF 化への道に技術改革しないかぎり、明日の経営を期待することは不可能であろう。

II 埼玉 SPF 豚センターの意義と現状

私は、私の乏しい知恵と力の全情熱を養豚一筋に傾倒して30余年、養豚経営の実際に心魂を傾注してきた。長い間、幾多の試練をうけ事業経営のきびしさを身をもって経験してきたつもりである。しかし、私は獣医師という一介の技術者の名誉にかけて、豚のあらゆる病気を克服し、伝染病も防圧し、今日まで大過なく一步一步規模を拡大し、現在本場と3分場を合わせ、約5,000頭規模の種豚基地牧場を不完全ながら育ててきた。

ところがここ数年、とくに Landrace 等経済能力の優れた豚の輸入後、原因不明の発育障害に悩まされ心痛一入であった。

そこで、SPF 豚に関心を抱き多くの文献を収集して研究検討を重ね、また欧米諸国の SPF 農場に幹部場員を数回派遣し勉強を続けてきた。そして一方、1967年より農林省家畜衛生試験場、各県養豚試および民間商社、ブリーダーとともに SPF 豚に関する共同研究を行ってきた。

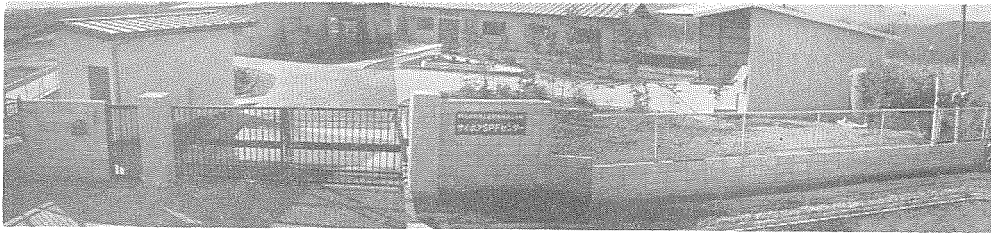
とくに農林省家畜衛生の柴田・波岡博士をはじめ先輩諸賢の指導と啓発により、SPF 豚研究の豚を対象として野外試験成績に照らし、SPF 豚の畜産実用目的のための実験農場として、埼玉 SPF 豚センターを1969年創設開場し

表1 豚の多頭化病の浸潤度と被害の推測(私案)

	浸 潤 度	被 害 度	摘 要
(1) 豚 コ レ ラ	0.5%	0.5%	41年発生 24,406頭 生ワクチン 42年 " 16,294" の完全接種
(2) S E P	80.0	30.0	流行性肺炎 Swine Enzootic Pneumonia
(3) A R	50.0	20.0	萎縮性鼻炎 Atrophic Rhinitis
(4) T G E	10.0	5.0	伝染性胃腸炎 Transmissible Gastro Enteritis
(5) 赤 痢	30.0	5.0	Swine Dysentery (Vibrio Coli)
(6) トキソプラズマ	40.0	10.0	Toxoplasma gondii
(7) 豚 丹 毒	20.0	5.0	急性出血性敗血症型 皮膚型 蕁麻疹型

注：被害とは経営上の損害推測である。

写真1 埼玉SPF豚センターの正門



たのである。

(1) 埼玉 SPF 豚センターの位置

埼玉県比企郡鳩山村大字竹本 Tel 玉川局
(049365)-293。

この埼玉 SPF 豚センターは正式には(株)埼玉種畜牧場鳩山分場で、本場より北方約 20 km, 車で約 30 分のところで、面積は約 10ha の広大な南面高燥丘陵地で、武蔵野の面影をとどめる情緒豊かな詩境である。緑の林と青い空、俗塵を離れたおいしい空気の桃源郷である。交通は八高線明覚駅下車, 南東約 2 km 埼玉県立玉川工業高校と武蔵嵐山ゴルフ場の中間にある。また東上線(池袋←→寄居・秩父)坂戸駅下車, 小川町ゆきバスで玉川高校前下車, 東約 500 m のところである。

(2) 埼玉 SPF 豚センターの現状

このセンターは SPF 豚の年間 1 万頭生産の一貫垂直経営を企図し, 3 カ年計画で完成をもくろんでいる。

本年は第 1 次計画が完了し次の施設が完成した。

施設

事務所・独身寮 1 棟 216.8m²
車庫 1 棟 60.0
SPF豚分娩豚舎 1 棟 968.2
消毒燻蒸室 1 棟 6.6
SPF豚育成豚舎 1 棟 883.0
シャワー室 1 棟 12.2
飼料庫 1 棟 68.8
放牧場 10 区画
SPF豚1970年 9 月現在287頭 (L200, W75, H12)
本年 2 月に Secondary I の生産が開始され

て以来, 毎月 3~4 腹の分娩が続き, また里子方式の Primary 豚も 6 腹を数えている。本年 12 月末には約 500 頭の SPF 豚を飼養することになるであろう。

人員は 5 名(うち 2 名は獣医師)が, あらゆるデータをとりながら管理に専念している。

(3) 今後の埼玉 SPF 豚センター

現在の SPF 豚は, 品種的には L, W, H を主力としているが, 明年からは全米 Hampshire の Grand champion の血液とアメリカ直輸入の W に重点を指向し, そしてミートタイプのホープである D (Duroc 種) の血液を導入し, 「経営能力が優れ, 商品価値の高い豚」の作育に英知を結集していきたいと考えている。

昭和 47 年施設完成の暁における規模は次のようになるが, SPF 原種豚を常時 600 頭とし, 年間 1 万頭の SPF 肉豚一貫生産をもくろんでいる。

施設は 46 年には改良ウインドレス豚舎, Total Confinement System で省力管理による企業養豚方式を採用し, 企業養豚経営の羅針盤を創造する心組である。

施設

Total Confinement System 豚舎	5 棟
産肉能力検定豚舎	1 //
育成豚舎	4 //
分娩豚舎	2 //
肥育豚舎	8 //
種雄豚舎	1 //
試験豚舎	1 //
研究室, 講堂	1 //

SPF 豚

SPF 母豚 600 頭

(L200, W150, H150, D100)
 SPF 種雄豚 20 頭
 (L5, W5, H5, D5)
 育成豚 800 頭 試験豚 300 頭
 肥育用肉豚 2,500 頭
 (LH, WH, WD……F₁)
 (LW, H, WH, D, WD, H……三元)

そして、47年にはサイボク東北牧場の一角約20haに埼玉SPF豚東北分場の建設をもくろみ、SPF豚による自立一貫経営を企図していることを付言しておこう。

Ⅲ SPF豚の未来像

現在、SPF豚に関しては一般におおかたの関心が薄く、客観的に批判のための批判がなされているように思われる。批判は自由であるが、産業養豚の確立に全情熱をかけている私は、SPF豚による集団転換 Swine repopulation に絶大な希望を寄せている。現在まで約2カ年、SPF豚を飼養管理した実験結果に照らし自信を得たので、今後は意を強くしてSPF豚による、自立一貫垂直経営を推進していきたいと考えている。

そこで、私の考えているSPF豚に期待するものと、未来像を要約してのべてみたいと思う。

1) 養豚の安定した堅全経営を推進できること

SPF豚に関する実験データはかなり出そろったように思われる。埼玉SPF豚センターの実績は別に発表のようである。

わが国の現在における豚の飼料要求率は3.8~4.5前後であろう。これに対しSPF豚では3.0を確実に下回っているので、飼料費が約25%節減できることが実証されている。

子豚哺育上、最も悩まされるのは病原性大腸菌などによる下痢症(白痢)である。このために哺育豚の死亡事故が多く、たとえ治ってもヒネ豚になることが多く、育成率が悪く不ぞろいの子豚となるが、SPF豚を飼養することによって、これらの問題は一挙に解決され、子豚の発育がそろい生後60日間で体重25kg前後の子豚が確実に得られる。

次に肥育日数であるが、現在 Conventional 豚では20~90kgの肥育日令は120~150日を

写真2 プライマリーSPF豚育成舎

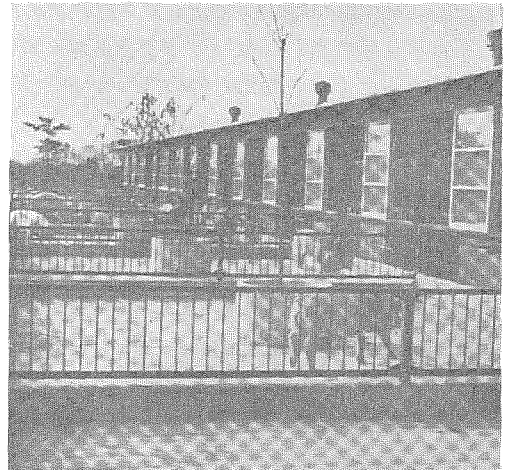
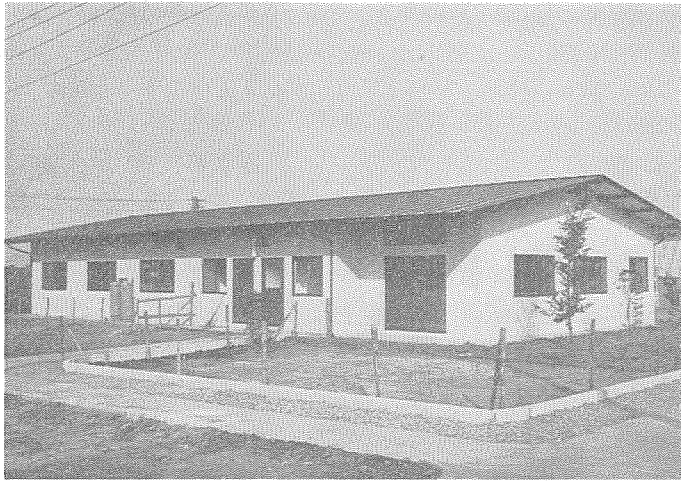


写真3

SPF
豚舎の
内景

写真 4

埼玉SPFセンター事務所



要する。しかし、SPF 豚では 90 日とすることがので 30~60 日間の短縮が容易である。Conventional pigs による肥育豚経営の回転率は年 3 回であればよいほうであるが、SPF 豚ではまったく同じ労力と飼料で年 4 回転が確実に期待できる。

今から 10 年前は、子豚市場もなく子豚の流通体重は 10~12kg 内外で、しかも自家配合の粗末な飼料で体重 90kg、日令は 150 日内外であった。現在における子豚の流通体重は 30kg 以上となり、きわめてすぐれた完全配合飼料を給与しているが、体重 90kg、日令が 120 日以上を要していることはどうしたことであろうか。豚の資質能力も高く、飼養管理の技術も向上しているにもかかわらず、このような成績であることは、一にして病気が根因で強力なブレーキをかけているものと推断してもよいであろう。

要するに、豚の天与の経済能力を十分に発揮できる環境、つまり SPF 状態で健康な豚を飼養しないかぎり、養豚の経営目的を達成することは不可能である。ここに SPF 豚飼養が期待されるゆえんがあるのである。

2) SPF 豚の飼養はそんなにむずかしいものではない

SPF という横文字で書くから、かなりむずかしいもののように思われがちであるが、そんなにややこしいものではない。養豚経営上、当然処置しなくてはならない当然の予防衛生に透

徹すればよいので、要するに SPF の状態、つまり清浄な状態で健康な豚を管理すればよいのである。

清浄な状態で健康な豚を飼養管理する必要性は、だれでも承知している。清浄化ということは、SPF 豚を飼養し、管理者以外の他人の出入りを厳禁し、SPF 状態を保つ約束を確実に守ればよいのである。

3) 豚肉の商品価値を高めること

私は SPF 豚の肉は、サシミ用の豚肉だと俗称している。SPF 豚といわずに、むしろサシミ豚と呼んだほうがピタリと大衆に迎えされるのではないかと思われる。豚肉は煮たり焼いたりしなくては食べられないものと習慣づけられているが、清浄肉としてマグロや桜肉のように、サシミで食べられる豚肉の質的増産が要望されているので、私たち養豚家は、これらの世論に答える豚肉を生産する義務があるように思われる。

4) 計画生産、計画出荷ができること

昨今は畜産公害がかなりうるさく論議されているが、これからの企業養豚は山腹丘陵地帯に集団移動を余儀なくされるであろう。新しく事業としての産業養豚を創設する場合は、Conventional pigs を飼養するよりも、当初から SPF 豚を飼養し、SPF 状態で清浄下のもとに管理するほうが得策である。

そして、SPF 豚であれば事業経営の基本と

もいえる計画生産、計画出荷が可能であるので、明日の夢に結びつく経営が推進できるであろう。

これからの養豚生産路線の目標として、私が提唱する3・3・3システムの生産路線の実現も容易に可能であろう。この3・3・3システムとは生後30日離乳、それから30日特別育成で体重25kg前後、続いて3カ月飼養で体重90kgに仕上げる方式で、SPF豚であれば不可能ではない生産路線である。そして、また豚のall in, all out方式も自由自在に実施することができるであろう。

む す び

以上、埴牧SPF豚センターの紹介をかねて、

SPF豚に関する私の養豚経営倫理に照らしての知見の一端を、卒直に開陳した。

ともかく、SPF豚という新しいサシミ豚が清浄肉として、早くも実用化の域に登場し、身近なものとなり、わが国の養豚界に新しい話題を提供している。

SPF豚については今後とも、なお研究を積み重ねていかななくてはならない点が数多く山積みしているが、ともかく、SPF化への豚の集団転換実現の寸前までこぎつけたことは喜ばしいことである。

私はSPF豚の今後の発展を期し、懸命の努力を続けることを誓い、明日の夢に直結する産業養豚がたくましく躍進することを祈念して筆をおくことにする。

※

※

※